

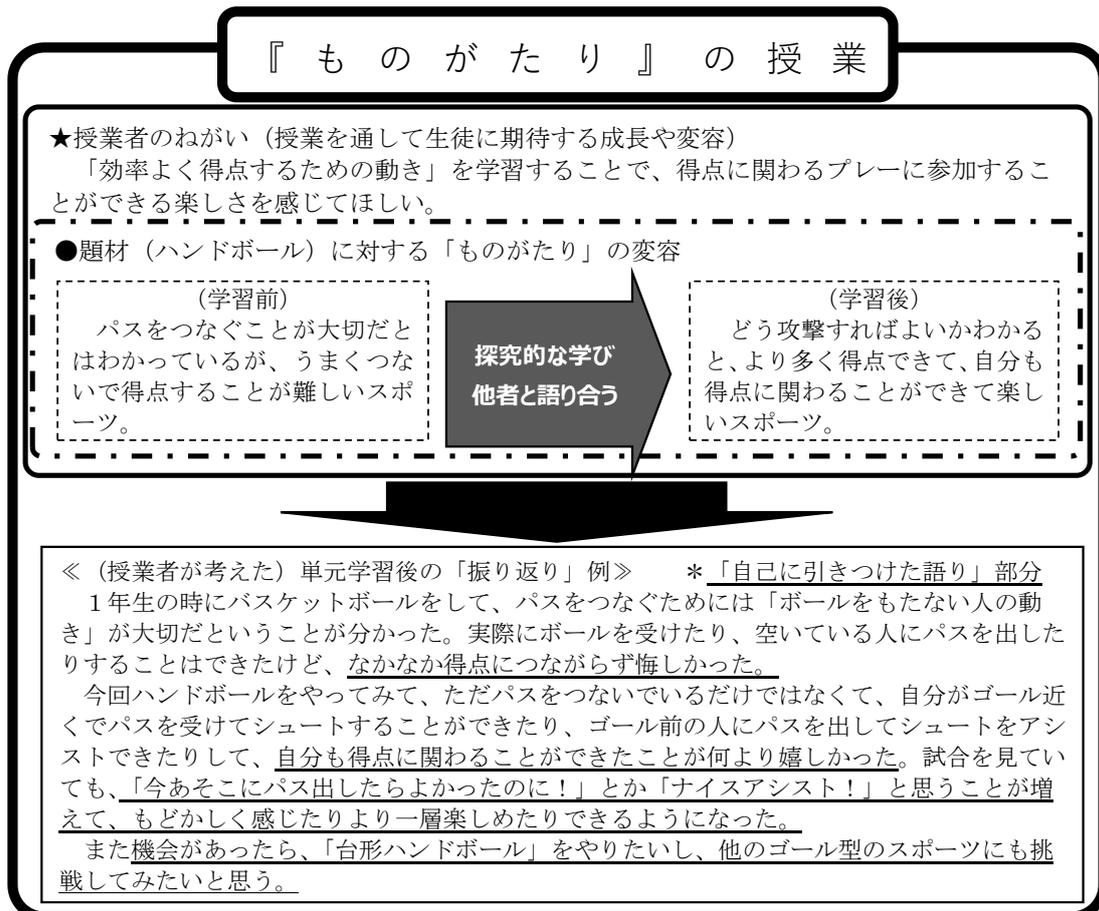
2023 年度実践事例と分析

【実践事例 1 「球技（ゴール型）ハンドボール」実施学年 2 学年】

1 単元構成と学習課題（本時 8 時間／全 12 時間）

時間	学習課題	学習内容
1	ハンドボールってどんなスポーツ？	ハンドボールの歴史やルールなどの知識を獲得する。
2	ボールを正確にコントロールするには？	ボール遊びでボールに慣れたり、パスやキャッチなどの基本的なボール操作のポイントを考えたりする。
3・4・5	たくさん得点を取るためには何が大切だろう？	リーグ戦Ⅰを行う。 試合をする中で、個人のボール操作やチームの得点することに対する課題を考える（感じる）。
6	自分たちの課題を克服しよう。	個人のパスの精度やキャッチに対する課題に対し、パスの「力加減」、パスを受ける「走り方・視野の確保」、「キャッチからパスまでの速さ」の視点からコツを考える。
7	得点を増やすためには何が必要だろう？	1 位チームと 6 位チームのデータを比較し、得点を増やすために必要なことを考える。考えたことをもとに作戦を立て、練習試合を行う。
8 (本時)	速くボールをつないで「シュート有効エリア」でチャンスを作るには？	「シュート有効エリア」に速くボールをつないでチャンスをつくるためのポイントを、3 つのチームのデータを比較して、どのようにパスをつないでいけばいいのかを考える。
9・10・11	パスをつないで大量得点を目指そう！	リーグ戦Ⅱを行う。

2 本単元の「ものがたり」の授業構想図

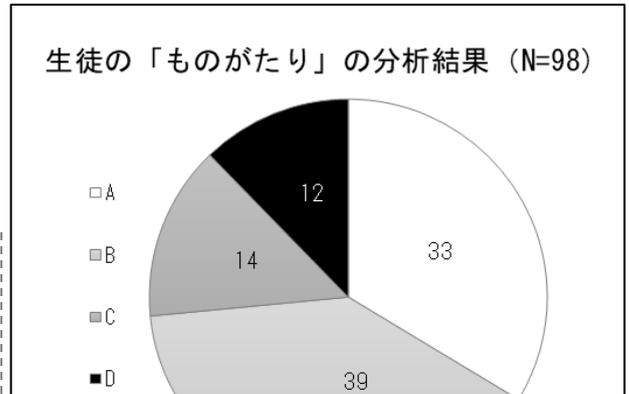


3 分析

(1) 題材に対する「ものがたり」の変容について

① 自己と題材に対する変容の割合

単元後の記述をA～Dに分類し、自己と題材に対する「ものがたり」が変容した生徒の割合を数量的に分析した。右図は、その結果である。



A～Dの基準 (Aにいくほど自己に引き付けている)

A : 題材と自己の変容が見られ、葛藤を感じながら学びを自分の言葉で意味づけ・価値づけしている

B : 題材の変容が見られ、学びを自分の言葉で意味づけ・価値づけしている (ただし葛藤は感じていない)

C : 題材の変容が見られるが知った、分かったにとどまっている

D : 題材の変容が見られるが弱い (もしくは見られない)

A : 変容あり。学習したことを駆使・試行錯誤している (葛藤あり)。題材の価値づけあり。

B : 変容あり。学習したことを駆使・試行錯誤しているがあまり困難や葛藤は感じていない。価値づけあり。

C : できた。わかった。 D : 変容うすい。なし。

② その具体

A 題材と自己の変容が見られ、葛藤を感じながら学びを自分の言葉で意味づけ・価値づけしていると判断した例 (M女)

学習前は、ハンドボールがどんなスポーツなのかも知りませんでした。ビデオを見たときも、ボールが速くて怖そうだと思いました。ボールを使ったスポーツが得意ではないので、不安だったけど、実際にリーグ戦とかをやってみてとても楽しいと思いました。

単元の中で、シュートが入らなかつたりパスが繋がらなかつたりとたくさん迷うことがあったけど、みんなで話しあつたり、実際にパスの練習をしたりして、できるようになってうれしかったです。特に上手になったと思ったのが、とおくからのパスを受けることです。最初は、4/4でおとしたり、むだにしてしまっていたけど、しっかりと最後までボールを見て動くことで、はやいボールもとれるようになりました。

単元を終えて、ハンドボールはとても楽しかったと思います。球技のなかで1番楽しくて、よかったです。ドッジとかでは、はしっこのほうであまりうごかないので、そんなにつかれたりしなかつたけど、ハンドボールはたくさんうごいてパスをもらえたので、うれしいです。

今回の単元で、パスのしかたやボールのとりかた、シュートのしかたなど、たくさん学べて良かったです。最初と、全然ちがう球技のイメージにかわつたので、とても価値があつたと思います。他のときよりも自分からパスがとりやすい場所にどうできて、けっこういいかんじにパスが繋がつたときはとてもうれしいし、達成感がすごかつたので、これからも、積極的にうごこうとおもいました。ハンドボールを通して、球技がとても楽しいものだというイメージにかわつたので本当にうれしいです。これからも、ハンドボールでえた知しきを生かしていきたいです！

C 題材の変容が見られるが知った、分かったにとどまっている例 (O男)

一年生のときにハンドボールと同じゴール型のスポーツであるバスケットボールの学習をした。バスケットボールではどこにパスを出すかなどパスが重要であることを学んだ。なのでハンドボールもパスが大事になると考えていた。

試合をやっている中でハンドボールではやはりパスが大事だと思った。パスをどこに出すかはとても大事だが、チームメイトがパスを出しやすい位置に移動することも大事だとわかつた。実際にチームでパスが出しやすいような作戦を建てて、試合をすると問題だった攻撃回数が多くなつた。しかし、パスのキャッチミスやシュートミスがたくさんあり、点数はあまり上がらず残念だった。

今まではあまり考えずにパスを出したり、受け取ったりしていたように思う。しかしバスケットボールやハンドボールの学習をしたことによって、チームメイトがパスを出しやすい位置に移動したり、どこにパスを出すかを考えたりするようになった。

(2) 単元における生徒の実際

① 分析の視点

[視点1] 自分のからだに考えを巡らせ続けるための単元構成の工夫

[視点2] 自己の感性が表出される振り返りの工夫

② 分析の対象

抽出生徒A (M女) : 学習前のアンケートでは、体育の授業で、できなかった動きができるようになったり、一緒に学ぶ仲間との絆が深まったりすることに達成感があると答えている。ボールを扱うことやチームスポーツ(戦術面)を苦手としている。ハンドボールをするにあたって、「迷惑をかけないように動きたい」と考えていた。

抽出生徒B (O男) : 学習前のアンケートでは、体育を学ぶ意味・価値を感じていない。(保健は生活に直結しているため価値があると感じている) からだの動かし方がわかったり、器械運動などで技ができたりすることに楽しさは感じている。ハンドボールをするにあたって、1年時に学習したことをもとに、「パス」が重要だと考えている。

【5時間目を終えた抽出生徒Aの振り返り】

最初は、ボールが取れないことが多かったけど、さいごは2回ともおいところからのボールをとれました。勝てなかったけど、ボールになれることができてうれしかったです。

【5時間目を終えた抽出生徒Bの振り返り】

今まではパスを少しずつつなげていたけど、おもいきって遠めにつなげることで得点をとることができた。

【6時間目を終えた抽出生徒Aの振り返り】

今日は試合はしなかったけど、ボールの投げ方、受け方がよくわかりました。やっぱり、遠くのボールがとれないので、もっとはやく走りたいです。

【6時間目を終えた抽出生徒Bの振り返り】

走りながらパスを受けるときには、半身になるととてもパスがとりやすいと知り驚いた。

リーグ戦終了時、抽出Aの生徒は、これまで苦手としていたことができるようになったことで喜びを感じている。個人的な技能の向上について触れているが、得点に関わるプレーについて触れていない。6時間目終了時の振り返りからも、技能面に課題を感じていたことがわかる。一方で、リーグ戦終了時、抽出生徒Bは、どのようなパスが、得点を取るために有効か試行錯誤している姿が見られる。しかし、6時間目終了時には、技能面での気づきがあったことに驚いた様子である。

学習前のアンケートから、抽出生徒Aは技能面の苦手意識から、パスやキャッチができることできないことで情意が働き、抽出生徒Bは戦術面を重視していたことから、戦術を生かすための技能練習という視点で学習したことで情意が働いたと考える。

【8時間目を終えた抽出生徒Aの振り返り】

今日はシュートが2回も入りました。自分から、とおいに動くことで、たくさんパスをもらえて、スムーズにいけました。後半だけでけっこうシュートが入ってうれしかったです！

【8時間目を終えた抽出生徒Bの振り返り】

チームで建てた作戦を使うと確かに攻撃回数が多くなった。しかしパスミスなどが多く点はあまり入らなかった。

抽出生徒Aは、技能面だけではなく実際に試合の中で自分が「得点に関わるプレー」に参加するための動きを理解して実践できたことで、チームに貢献できたと感じ、情意が働いたと考えられる。一方、抽出生徒Bは、実際に「得点に関わるプレー」を実践しようとしたが、技能面のミスから理解しているのに実践できない葛藤を感じている。6時間目に技能練習をしたこと、7・8時間目で戦術の学習をしたことで、2人のゲーム中で重要とする視点が切り替わったためと考えられる。

4 考察【成果（○）と課題（●）】

- [視点1]において、「自分のからだに考えを巡らせる」ことは「わかっているけど実践できない」「わかってできそうだけどできない」「できなかったことができるようになる」というように、生徒が困難や葛藤を経て、達成感を味わうといった情意が働くために必要な活動であると考え。6時間目で、リーグ戦で感じた技能面での課題を克服するために、パスやキャッチにおける「体の動かし方」を学習し、7・8時間目で戦術における学習したことは、抽出生徒Aのように学習したことを試合で生かしたと実感したり、抽出生徒Bのように学習したことが生かせず葛藤を感じたりと、情意を働かせるために有効だったと考えられる。また、単元を通して「的あて」を授業開始時に行った。高得点を取るために「どのように体を動かせばよいのか」と問い続け、目に見える形で投げる動作の成長が感じられたと思う。
- [視点1]において、「からだに考えを巡らせる」ためのしかけや問いについて再考する必要がある。本単元では「体の動かし方」に考えを巡らせることには一定の成果があった。しかし、「からだ」は「心身。触れることのできる肉体と、その肉体がもつ心も含めたもの。」であることから、思考やそれに伴う行動も含まれる。戦術を学習するにあたって、生徒が課題を把握するために「自分はどう動いているのか」、作戦を実行するために「どのように動けばよいのか」ということに考えを巡らせることも、「からだに考えを巡らせる」ことである。そのために、単元内や8時間目において、自分の情報を映像やデータ等でメタ化したり、特定のチームの動きやデータの比較をしたのちに、「自分（たち）はどうなのか」という視点で分析したりする時間を設ける必要があった。
- [視点1]において、ドリル学習や補強運動の精選が必要である。「的あて」を継続して行ったことで、「投げる技能」についてはある程度の成長を感じた生徒が多かったが、ハンドボールにおいて、「キャッチ」の技能も欠かすことができない。抽出生徒Bは、戦術面において単元を通して考えを巡らせつづけていたものの、チームとしても個人としても技能面で実践できなかったために、単元終了後に残念感が残ってしまった。動きながらパスを受けるために、6時間目の単発の練習だけではなく、継続して対面パスや2メンなどのドリル学習を行う必要がある。試合の中で必要な技能をある程度のレベルで保障したうえで、技能差を超えて同じ土台で「できそうでできないこと」について語ることが、抽出生徒Bのような生徒にとっても更に情意を働かせることにつながると考える。
- [視点2]において、毎時間の振り返りや単元終了後のものがたりの記述の視点の再考が必要である。本単元では毎時間の振り返りを下記の図のようにしているが、「楽しい」こと「感動した」こと「悩んだり熱中したりしたこと」の何に対する理由かわかりづらい記述も多かった。授業終了時の「気持ち」とその理由について記述させるような様式に変更していきたい。それに伴って、ものがたりを記述際にも単元の時系列に沿った自分の感情や考えの変遷という視点から記述しやすくなると考える。

単元を貫く問い：相手より多く得点するためにはどうすればよいか		
回	自己評価（はい…3 どちらでもない…2 いいえ…1）	
7	学習課題：	
日付	楽しいと思ったことはありましたか	その理由を具体的に書きましょう。
/	感動することがありましたか	
	悩んだり熱中したりしたことはありましたか	
	自ら進んで学習できましたか	

【本単元の毎時間の振り返り様式】